

# 広島漂流会議

『若者に投票を促す動画付きホームページ』篇

転進堂

原爆ドーム正面の川には、広島でカップルになると一度は乗らなければならない二人用手漕ぎ貸ボートがある。きょうも数十組の男女。そして来るべき日に備えて漕ぐ練習に励む男同士が数組。

学生服姿の俺はとりあえず、ひとりで漂っている。

プランナーはこんな状況を浮かべた。とりあえず。季節も特に設定していない。そのことを映像業界では昔「オールシーズン」と言っていたが、今は言わないのは、なぜだろう。

それはともかく、課題は、若者に投票を促す動画付きのホームページらしい。詳細がわかるのは、珍しく時間に遅れている代理店の社長が来てから。

ウェブディレクターとの二人ブレストは、いつものように挨拶も無いまま始まっている。

「広島市民向けの動画だから原爆ドーム出さないかね」

東京から郷里広島に帰ってきて5年のプランナーの言いそうなことだ。

「どうかねえ」

広島で25年仕事しているウェブディレクターは慎重だ。

海側がガラス張りのカフェ。上手かみに宇品島、かなり下手しもに金輪島、海はほぼ波のない広島湾。脳内ビジュアルを投影するのちょうど良い、季節も曖昧な抽象的景色。

「この男子は『俺』じゃなくて『僕』だよね。お役所の仕事だし」

プランナーのこの辺の発言については、ウェブディレクターは聞き流すことにしている。「女子は美人がいいよね。なにかといろいろ」

俺ではない僕は今、原爆ドーム正面の川で美人とボートに乗っている。季節設定なし。

「あ、女の子も高校生だから制服だね」

「なんで、そういう設定なん？」

と、この辺から絡むことにしたウェブディレクター。

「え、こんな感じがいいかなと思って……。だめっぽい？」

絡む価値はなかった。

「とりあえず、それで考えてみようか」

マグカップに入った珈琲が運ばれてきた。

深煎りと中煎り。中煎りの方のプランナーは特に表情を変えるわけでもなく、

「きょうはちよつと心がこもってないかも」

ウェブディレクターはそれには触れず、

「一応聞くけど、彼らは昔の高校生じゃろ？」

「いいこと言うね。何も考えてなかったよ」

「だって変じゃろ。今の高校生が30年以上前のものに乗ってたら」

二人は同じ中学に通っていたが、高校時代も含め同じボートに乗ったことはない。

高校生の僕は学ラン。平たく圧縮整形されたクラリーノ製学バンを横に置き、美人女子

高生と向かい合って貸ボートに乗っている。  
元安川。川岸に原爆ドームがある。季節設定なし。

「バイオリンケース持ってもらおう？ しずかちゃんみたいに。そしたら雰囲気もイメージできるよね」

ウェブディレクターは少し考えてから追いついた。

「あ、ドラえもののしずかちゃんか。知り合いかと思ったよ」

「東京行った時にちょうど『ドラえもん展』をやってたね……」

その話に発展要素は無いと思った二人はそれぞれノートパソコンを開き、プランナーは続けてバッグから書類を取り出した。

「15年以上前にも企画したんだよね。若者投票促進ビデオ」

「つくったん？」

「いや、競合で負けた」

「どんなの考えたん？」

「覚えてないので、そのときのフォルダをそのまま持ってきたよ。設定は……」

プランナーは書類を棒読みし始めた。

「あるコンサルタント会社に舞い込んだ案件は『若者の政治への関心をどうやって高めるか』。その問題を解決すべく会議室に集められた面々のブレインストーミングが始まる……」

「未来を予言したような企画じゃね」

「あ、出したのはこっちだ。若者が政治に目覚めていくときを描くショートムービー。タイトルは『それは愛なのか』」

「人って、ほぼ変化せんのかなじゃね」

「そうそう。そんな変わらない人間たちが、何かを変えると騒ぎながら選挙するんだよ。俺なんか自民党に投票してはいけないという心の枷を解いたことないもんなあ。そういえば俺が若い頃からずっと『今は1930年代に近い』と言われ続けてるし……」

ウェブダイレクターは没シナリオを自分の

ところに引き寄せて読んでいる。

「出だし、面白いけど」

「でも、説得力ある話ではなかったはず。自分が今もわかってないもんね。なぜ投票すべきなのか……」

波音がしない大きな池のようでもある海をぼんやり見ているプランナーは付け加えた。

「投票行ってる？」

ウェブディレクターはシナリオを横に置いてパソコンを見ている。

「ときどきじゃねえ」

「俺はだいたい行くよ。不明な義務感だけど」

細かい波がちらちらと光っている。窓外のウッドデッキの柵にとまったカモメの抜けかけた羽根が1本、微風に震えている。

「若者は数では老人に勝てない、というのがあるねえ。投票に行かない理由として」

「なるほどね。じゃあ、年配者に投票休んでもらう？」 『年寄りは行きんさんな』キャンペーン。俺らは行っていないの？」

「……興味深いけど違うところ行こうか」

「やっぱし？」

「さっきの昔の高校生カップルの話はどう展開する予定？」

「カップルかどうかはわからんけど……」

プランナーは「原爆ドーム貸ボート」で画像検索した。

「今よりもっと痛々しかった修復前の原爆ドームと、ボートに乗った恋人たちの笑顔。この雰囲気がいけなかったのかな？　なんで無くなったか知ってる？」

「そういえば、なんでかねえ」

「存続か廃止か、投票は行われたのだろうか。選挙の争点にもなっていないはず」

「……ありや、そんなつながり方するんね」

「なんか思考がいい方向に進んでいるような気がするの俺だけ？」

ウェブディレクターは答えなかった。

僕は初デートの場所として、他の多くの広

島カップルと同様に平和公園のボートを選んだ。学校帰り。日は傾きつつある。浮かんでいるだけの僕たちのボートがゆっくりと回転すると同時に、オレンジがかった光が彼女の顔に差し込んでくる。と同時に原爆ドームが彼女の背景のほとんどを満たす。

「男子の名前考えてなかったけど、とりあえず、のび太でいいか」

僕と彼女にはいい加減な名前がある。

プランナーは画像検索結果の色褪せたカラー写真に見入ったままだ。

「そういうえば原爆ドーム周辺で大きな反核デモがあつて参加したなあ」

「大学入る直前よねえ？」

「そう。そのあとの東京も参加したけど、あの盛り上がりはどうなったんだっけ……」

「今盛り上がったなら、また参加する？」

「いや、どうかなあ。参加している間に疑問が湧いてきたんだよね。核兵器と通常兵器を分ける意味って何？」

「破壊規模の大小とか放射能の有無とか」

「いっそのこと武器全部に反対しようよ。ラ  
ディカルに」

「うん、いいよ」

「ありがとう。じゃあ、本題に戻ろうか。な  
んだっけ？」

「えーと、若者の投票率を上げる動画および  
ホームページじゃね」

「まあ、面白い選挙があればいいんだよね、  
まずは」

「そこはどうもできないから、選挙自体が面  
白く見えるような動画かねえ」

「そういうことか：：どういうこと？」

「：：どういうことじゃろ」

1分弱煮詰まった二人は、珈琲をもう一杯  
ずつ注文した。今度は深入りと中煎りを入れ  
替えて。

「それにしても遅くない？」

気づいたのはウェブデザイナーだった。

「あ、留守電。マナーモードで気づかなかつたよ」

と気づいていなかったプランナー。

「なんて？」

「介護が急遽やばいので来られないらしい：  
：仕方ないよね」

「大変じゃねえ。大丈夫かね」

「大丈夫じゃないかもしれないけど、俺にはなんもできんし」

「そうなんよね」

「お宅は大丈夫？」

「なんとか。そっちは？」

「なんとか」

ちょうど良く珈琲が来た。

「今度は心がこもっているかも」

「深煎りの方が好きなだけじゃろ？」

「そうかも」

フェリーがゆつくりと上手かみてから下手しもてへ滑つ

ている。

「平和公園のボート無き今、広島のカップルはどこに行くんね？」

素朴すぎる疑問がプランナーに、広島弁で浮かんだ。

「行くところぐらいいろいろあると思うけど」

「いろいろ言うてどこねえ？」

「……カープとか？」

「でも、カープは年齢層が結構高いじゃろ」

「……ボートって、今のカープ以上に若者集めとったん？」

とウェブディレクターにはまともな疑問が浮かんだ。

「いい質問するねえ。それはありえんよね」

「やっぱしい？」

「俺は何度も乗ったことあるけどね」

「ふーん」

「でも、ビジュアルとしていいよね。悲惨な過去を背景にした幸せな笑顔。平和ってそういうことでは、ないのでしょいか」

「なるほどね」

「なんでポート無くしたん？ 俺はこだわ  
けんね、この情景が本題につながるまで。と  
りあえず、きょう一日は」

オレンジがかった光が彼女の顔ぜんたいを  
照らす直前に僕は思わず。

「きれいじゃね」

「ほんとじゃね」

彼女は自分のこととは思わなかったようだ。

たしかに「きれい」なのは彼女だけではな  
い。穏やかな光に包まれた原爆ドームのむき  
出しの鉄骨とコンクリート、ポートの塗り重  
ねられたペンキ、川面、男女、男同士：：

その世界にプランナーの声が割り込む。

「若者をワイプアウトしちゃあいけんじやろ  
お。デレデレしとるのが気に食わんでも：：  
そもそも、平和の尊さを身に染みてもらうと  
いう目的にも反している。静かに拝むことよ

り、楽しい時間と一体となった原爆ドームの記憶の方が重要なのではないでしようか」

「原爆ドームと恋人ボート、熱く推すねえ」

「きょう一日の命っぽいし、この設定」

終末が迫る世界を流れる1本の川。その上を僕は漂っている。しずかといういい加減な名前を付けられた美人の彼女とっしょに。しかし、あまり悪い感じがしないのは、どういうわけだろう。

「すごい美人じゃね」

そこは念を押しておかないと後悔するような気がした。彼女は一瞬間をおいて、にっこり笑った。

「おかしいな。世界が消えてもいいような気分になってきたぞ」

プランナーはたしかにおかしい。

「まあ、ブレストじゃけん、とりあえず……」

ウェブディレクターはやさしい。

引き潮で流れが早くなった川。僕たちのボートは滑るように海の方へ。ちよつと漕いでみたが流れに逆らうのは無理だった。

「海行く？」

「まるで自分の意志で行くみたいじゃね。おかしい」

彼女の声が聞けた。風の音が少し混じっていた。細めの髪の毛が少しなびいている。

窓外の海が少し赤みを帯びてきた。波はほぼ消えた。典型的な瀬戸内海の夕方。

「ねえ、選挙って思っているほど影響力あるの？なるようになっていくだけじゃない？何が多数かを確認することに大した意味があるのかねえ」

たいてい出だしはプランナーだ。広島弁のイントネーションが消えた言葉が続けた。

「選挙って、このブレस्तよりもくだらんかもよ」

「投げやりなこと言うねえ」

「うーん、仕事向きメンタルではないよね。

振り返ってみれば生きてきたのが不思議」

「不思議じゃねえ」

「おかしいよね。世の中じゃなくて俺たち」

「僕はそうでもないよ」

海は紫色になってきた。大きな窓ガラスに、  
店内の様子と二人の姿がおぼろげに映っている。  
る。

「広島ではやっぱり言動に気をつけるでしょ？」

「そりゃあ、みんな知り合いの知合い以内に  
納まる人間関係じゃけえね」

「試しに『年寄りは行きんさんな』キャンペ  
ーン、推してみる？」

流れが穏やかになり、僕たちのボートはい  
つの間にかほとんど動かなくなっている。「オ  
ールシーズン」であつても日が暮れると肌寒  
い。彼女の顔色が少し悪いので聞いてみる。

「寒くない？」

「寒くないけど、お腹すいた」

笑顔で答える人からは余計に辛さが伝わってくるものだ、と僕は思う。

オールをぐっと握る僕。生まれてから一番の力で漕ぐ。川岸は高い土手。並木とその向こうの高い建物の上階だけが見える。次々と灯る窓の明かりを、僕は温かい声援と感じる。

「はやーい」

彼女の大きな声で、もう一段早くなる。息を切らしながら、僕も大きな声で伝える。

「ありがとうー。美人でもお腹が空くこと、忘れるとこじやったよー」

「ありがとうー。今度は私が漕いでいいー？」

「そうか、美人でもボートが漕げる。しかも僕より上手い。しかし、腹は減ってないのだからか。僕は、船底で移動を繰り返していた。バイオリンケースを大事に抱えてから叫ぶ。」「ぶちはやいでー」

ボートはさらに早くなる。

「元気に生きていれば十分じゃん」

とプランナーは唐突に大声になった。

「：：」

「ケーキでも食べる？」

と言ったもののプランナーは話を続けた。

「考えてみれば、選挙行けなんて大きなお世話だよ。投票行ってくださいってお願いするの、さらにややこしく変だよ」

「そのうち、選挙行ってもらうためにお金払はろうたりして？」

「え、大胆な発想だね。若者としては断り続けて金額を吊り上げた方がいいのかな」

窓ガラスには二人の姿がくつきりと映るようになつた。外を見ているつもりだったのに、ガラス面のプランナーと目が合ったような気がしたウェブディレクターは、とりあえず何かしやべっておこうと思った。

「投票が、なんの欲求も満たさんもんになつ

とるよね」

「このまま廃れた方がいいかもね」

下手しもてから上手かみてに横切るフェリーの明かりが

ガラス面のプランナーの胸に突入した。

「これは投票への勧誘活動だよね。普通に考  
えると投票とか選挙の魅力を伝えなければい  
けないわけだけど、それはなに？」

「なんじゃろ？」

「票入れた立候補者が当選したとしても、な  
にかいいことあるような気がぜんぜんしない  
んだよなあ。議員さんって実は不要とか？」

「そこはノーコメントにしとくけん」

「あ、投票率と議員数が比例するのはどう？  
投票率50%なので議員数半分になりました」

「面白いけど、仕事が見えんくらい沖に流さ  
れてしもうたねえ」

「まあ、仕事が現実から離れ過ぎているとも  
言えるよな」

「現実に予算が出とる仕事じゃけどね」

「：：世の中にはたぶん、現実離れした現実

がいつぱいあるんだよ」

フェリーが視界から消える頃、ウェブデイレクターは落ち着いて言った。

「もしかしたら、投票機会がいつぱいあれば、結構楽しくなるとか、ない？」

「……それは案外あるかもね。選挙にできるものは、なんでもかんでも選挙にするとか？馬券投票システム以上のシステムを作って」

「そう、毎月のように選挙」

「投票依存症続出。新たな社会問題に」

「……なんで、そういう方向に」

僕たちはボートから降り、船着き筏と原爆

ドームのある陸地をつなぐ不安定に揺れる橋を、ごく自然に手をつなぎ走って渡る。

ちょうどそのときデモ隊が、原爆ドームと元安川の間の道を進んでくる。人ごみの圧力が二人の手を離し、彼女を飲み込む。

「あゝのび……」

「しずかちゃん」

名前があるので呼び合えたが、彼女の姿は見え、無数のプラカードが視界を遮る。『もつと選挙を！』『すべては選挙すべき問題だ！』。デモ隊の中に一瞬プランナーの顔。『貸ボート廃止反対！選挙で決めろ！』。

僕は憤りつつ立っている。しずかちゃんとご飯を食べながら聞けるだけのことを聞いてぜんぶ記憶するという僕の素朴な希望を奪ったデモ隊に、問いたいことがふと浮かぶ。

「投票機会を増やしたところで、単純に白黒つけたものが増えるだけではないだろうか」

「ほんまよお。誰好きか書いた紙たくさん集めても、どこが好きかもわからんよのお。嫌い言うてほんまは好きじゃったり。何項目か聞いてクロス分析ぐらいせにやあ本音は……」

急に濃い広島弁となったプランナー。ウエブダイレクターは変わらず穏やかに、「次回は、フェリーブレストにせん？」

「ええねえ」